

ライトアップニンジャ@ BALI

Indonesia, Bali

2005. 08. 24-27

インドネシア・バリで乾期の風物詩として知られる風揚げ。この時期至る所で見られる風を今回探偵団が“光る風”にアレンジしてしまいました。そして、バリの民俗芸能が息づく街ウブドでは炎の“ケチャダンス”のダンサーたちが彼らも初めて見る光で変身！バリの人たちの目に探偵団のしかけはどう映ったのでしょうか？



大風を持って村を行進

■バリに照明探偵団？

今回私たち照明探偵団がバリへ向かった目的は二つ。ひとつはバリの乾期の風物詩として知られる風揚げを夜に“光る風”にアレンジするということ。風揚げ場所となったのは Sanur に程近い Sidakarya という村にある何の変哲も無い原っぱ。この村が所有している伝統的な大風を夜に光らせてしまおうという試みです。先頭には龍のような頭が付き、幅 5m、尻尾が 100m もあるような大風は、日本で言えばさしずめ御神輿のような感覚なのでしょうか。この尻尾にサイリウムを付けて光で変身させました。

もうひとつは民俗芸能が息づく町ウブドで、炎の光だけを使って屋外で行われている“ケチャダンス”を照明探偵団風に新しい光を使って演出すること。



風揚げメンバー全員の集合写真

バリの闇を背景に、赤い LED の揺れる光を散りばめ、会場を取り囲む神木のように見える立派な樹をハイパワーの懐中電灯でアップライトしました。初めて見る光に取り囲まれてのパフォーマンスにダンサー達も次第にリズムに乗ってきました。ケチャダンスとカラーライティングの競演に皆が酔いしれた一夜でした。

これまで日本でゲリラ的に街を照らしてきたことはあったけれど、海外で、しかも夜には完璧な闇が背景となるバリのような場所で、現地の人たちと一緒に何かを照らす、という試みはもちろん初めてです。これまで使っていた“ライトアップゲリラ”という名称も、昨今の世界情勢を鑑みて“ライトアップニンジャ”に改めて第 1 回目の記念すべきイベントとなりました。

(田沼 彩子)

■バリの夜の風上げ大会 - “Lighting up the Wind !”

バリでは風の強い毎年 7 月頃に村対抗の風上げ大会が行なわれる。今回の照明探偵団は、その大会で優勝したことのある村の人たちと一緒に、“夜”の風上げ大会をした。

夕暮れ前の原っぱに、“Lighting up the Wind”と書かれた T シャツを着た団員と村の人たちが集まった。暗くなるまで時間がない。この日のために用意した風の準備を始める。村の人たちの自慢の風は、バリ風のドラゴンの形をした胴体に、長さ 100m 程もある巨大な尻尾がついたものだ。その尻尾に 5 色のサイリウム約 500 本を急いで取り付けていく。

村の人たちの協力もあり、なんとか準備も終わった。真っ暗な原っぱに松明が灯り、ガムランの音楽が流れる中、風上げ大会が始まった。

最初は、村の人たちの巨大風だ。風を待ち、30 人程の村の人たちがいっせいに走り出す。巨大風が、音を慣らしながら、空に舞い上がっていく。風が十分強くないため、ゆるやかに弧を描きながら落ちていった。しかし、その姿はとても壮大だった。

次は、団員の創作風だ。サイリウムをつけた 10・30・50 連風、青い LED が風車のように回転する連風、行燈のように光る箱型風、スパンコールが輝くミラー風、などなど。ユニークな風が空に上がっていく。これらの風には、村の人たちも興味津津で、“夜”の風上げ大会をとても楽しんでいるようだった。

(菅又 健雄)



ガムランの BGM が雰囲気盛り上げる



夜空に舞う大鳳の軌跡

■ Kite - A Catcher of wind and light

Wind is an intangible formless element which can be felt, but cannot be seen. With the presence of a kite, one can “see” the wind due to the movements in which the kite sways in the wind. A kite is simply a vehicle for wind. Light is similar to wind in many ways. Both are ephemeral, transient and need to be caught on a surface or platform. Thus, a kite can also be transformed into a platform for catching light and together with the presence of wind, the interaction of all 3 elements result in movement and dynamism. The platform is a 2x1.5m triangular black kite with a “tan” character made out of silver and white spangles in the center, assorted colours of spangles, mirror bits filled the rest of the kite, down to the tail. The kite became a multi-faceted surface, and the reflections lit the sky with shimmers and glitters. A handheld high-power narrow-beam flashlight was used to shine at the kite which flew at 20 to 30metres height. Experiments were conducted to catch the patterned reflected light on the ground. The kite’s weight was crucial and the size of the mirrors and spangles have to be compromised, thus the effect of the reflected light on the ground was not obvious. (Toh Yah Li)



スパンコール付き光る探偵団風

■ LIGHTING UP THE WIND: Lighting Detectives in Bali 2005

Once an evening in Bali brought a constant humming from the sky - with the cacophony of frogs and crickets. Mesmerized. Alluring. This sound actually came from the hummers that are attached to giant Balinese kites. This memory stayed fresh. As ideas for the workshop of Lighting Detectives came in for 2005, we thought to illuminate this Balinese experience. Though invisible, the wind makes its presence on everything it touches. The kite is man’s way of the wind’s revelation. Illuminating this rhythm against the black hue of the Balinese night sky should be enchanting, magical. The main kite was flown in Sidakaria, home of the champion kite team in Bali. It was similar to the Balinese traditional kite, the Janggan (dragon). 40 x 50 feet, with a 300 feet long tail. Light sources adorned the tail. Kites made by students of Musashino Art University and staffs of LPA also lit up the sky like floating lanterns. The locals actively participated and made the event a success. This workshop has set an example of how lighting can be used from the grassroots level of society to create a memorable experience. (GAURAV JAIN)

■ ケチャに会った3日目の晩

1,2日目と風揚げが成功して、3日目。光のWorkshopの第2弾「ケチャWS」を決行した。探偵団一行が予定の7時より5分ほど遅れて到着すると、日はすっかり暮れて町が闇に包まれていた。車を降りるとすぐにケチャダンスの団が松明をもって私たちをお出迎え。歌よりも音に近い、「ニィニィ」というインドネシアンの子供達の声とつぶらな瞳が道端に並んでいた。その道には、街灯がなく、松明のあかりがとても明るかった。

野外ステージは、日本の神社の境内のような場所で、周りに大きな木が数本ある小広場だった。私たちは、その手前の階段に腰をおろした。今回のケチャは、照明探偵団がレンタルしたものであったので、客は私達とたぶん近所に住んでいる親子連れ、もしくはダンサーの家族と思われる人達だけ。会場への道案内はまるでパレードのようで、どこからともなく見物人が現れた。

光の細工を踊り手に仕込み、今までにない光の中でケチャを踊ってもらいたい、とお願いをしていた。ケチャのダンサーは、まず我々の様式のケチャを黙ってご覧あれ、

と45分間。その後、私達が用意したヒカリモノを身に付けて踊ってくれた。総勢50人程だろうか、闇の中でパリの象徴的な黒と白のチェック柄の腰巻1枚を身にまとい、火を使い、体の筋肉を使い、顔の表情と声のみを使って演技が行われる。見ていてゾクゾクした。火を投げたり、蹴ったりというようなパフォーマンスもあり、興奮の連続。あまりの凄さに、私達の方で用意したものを出すことに怖気づきそうになる。用意したのは、光るサイリウムの腕輪とイヤリング、赤いLEDのスウィングライト、ハイパワーのキセノンランプと各自2台ずつ持参した懐中電灯とカラーフィルターだ。

白い光で照らされた木とゆらゆら揺れる赤いLEDの背景を作った。“ケチャケチャ”と囁き合いながら腕を高く挙げたり、下げたり。その動きに合わせカラフルな光の輪が踊る。すっかり度肝を抜かれていた私達はともかく、もの珍しい腕輪を見つけたダンサーの緩んだ表情がいい。今回パリの人達と出会い、交流を楽しむことできた。言葉が通じない異国の地で光を通して交流を持てたことは、とても幸せな経験だった。

(上田 夏子)



奇妙な手の動きが軌跡をつくる

Transnational Tanteidan Forum 2005 in NYC 開催

NYC, USA

2005.09.22

今回で4回目となるTransnational Tanteidan Forum。世界各都市に根付き始めた照明探偵団支部のメンバーが年に一度顔を合わせて行うフォーラムです。今年のテーマは“Main Street”。世界の“銀座通り”はどのようなあかりで構成されているのでしょうか？

■ Transnational Tanteidan Forum 2005 in NYC

好天に恵まれ秋晴れの続く気持ちいいニューヨーク。2001年に東京で始まったTransnational Tanteidan Forumも今年で4回目となりました。世界各国に広がりつつある照明探偵団ネットワークですが、年に一度各支部のメンバーが集まってフォーラムを行っています。現在のところ6ヶ国11名がコアメンバーとしてこのフォーラムを運営していて、今回はニューヨーク支部がホスト国を務めました。会場はマンハッタン AIA Center for Architecture、日本で言うところの建築学会のようなところです。



熱心にプレゼンテーションを聞く聴衆たち

■ メインストリートのあかり

今回のテーマは“Main Street”。昨年の“Daily Transportation Facilities”(日常利用する交通施設)、というテーマに続き、今回も Public Spac のあかりに焦点を当て、どの都市にもある目抜き通りのあかりがどのようなものなのかを都市ごとに徹底調査しました。

まずは開催都市ニューヨーク支部 Jason Neches からのプレゼンテーション。マンハッタンのは通りは五番街、マディソンアベニュー、そしてタイムズスクエアなどそれぞれにメインストリートの要素を持ち合わせています。通りが高層ビルの谷間に位置することがやはり大きな特徴で、お店の看板やウィンドウのディスプレイなど、建物の低層部のあかりが通りの景色をつくっています。

ストックホルム支部 Aleksandra Stratimirovic は美しいブルーモーメントの写真を多用したプレゼンテーション。大通りの起点・終点となる広場にある光の彫刻が、寂しげな冬の街のランドマークになっています。

コペンハーゲン支部の Lisbeth Skindbjerg Kristensen はストロイエを中心とする、コペンハーゲンの街路の主照明となっている吊り下げ型の“カテナリー照明”を紹介。建物から吊られて通りの中央に照明器具が配置されるこの手法はやはり効率的です。

シンガポール支部の葛西玲子さんは進行中の都市計画を挙げて、オーチャードロードなどを紹介。ややもすると無味乾燥なナトリウムランプのポールがただ並ぶだけの面白みの無い大通りが、これからどのように変化していくのが楽しみです。

ハンブルグ支部は Ulrike Brandt。エルベ川やアルスター湖のあるこの美しい街は水の都。町中にももちろんメインストリートはあるけれど、彼らにとってはエルベ川がむしろ日常的な“大通り”。川に面した建物や碇泊する船からのあかりが景色をつくっています。

東京は面出団長が、誰もが認める Main Street、銀座中央通りをクローズアップ。武蔵野美術大学のゼミ生たちにも協力してもらって調査した内容を、①銀座通りの歴史的背景、②デザインの豊富なポール灯の数々③通りに面したファサードに分けて紹介しました。圧巻だったのは、8mの長さにつなげてプリントアウトした銀座1丁目から8丁目までのファサードの夜景。光の分布や今流行りの照明手法の特徴がよくわかります。

会場には建築や照明の仕事に携わる人を中心に200名もの参加者が集まり、最後まで熱心に話を聞いていました。

(田沼 彩子)



パネルディスカッション



フォーラム後にメンバーで集まって記念写真

第26回街歩き 銀座 新しい銀座の光

2005.07.12

最近の銀座では、シャネルやヴィトン、ディオールなど、ファサードに特徴を持った建築が多く見受けられる。それらの光がどのような特徴を持ち、どんな表情を見せてくれるのかを探ることを目的に、我々照明探偵団は調査を行うことにした。今回は、数ある通りの中から、銀座通り、晴海通り、並木通り、みゆき通り、花椿通りの計5つの通りを比較する為に、4つのグループに別れて調査した。

■銀座通り

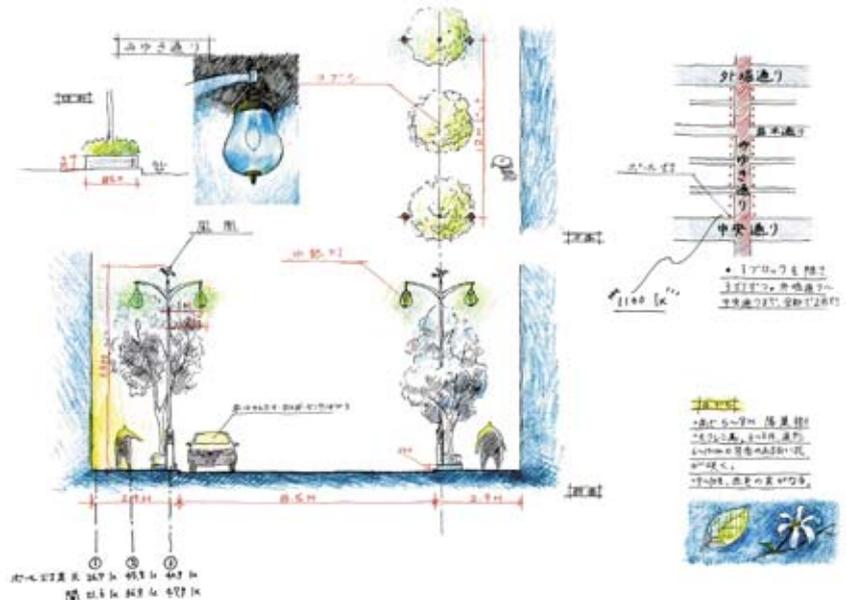
銀座通りは、特に変化の著しい通りではないだろうか。シャネル、カルティエ、ヴィトン、オペクなどのブティックは、どの店舗もファサードを通して個々のアイデンティティーをアピールしている。人通りが多いことや、人目につきやすい場であることも理由として挙げられる。道路が周囲に比べて少し明るめのグレーで塗装されていることもお気づきだろうか。アスファルトのような明度の低い色は、光の路面反射率が低く、実際に照度が確保されていても暗く感じてしまう。他の通りと比べてみると、銀座通りは明るく感じる。



夜の銀座をつくる新しい光とは？

■晴海通り

晴海通りの特徴はネオン広告が数多く存在することだろう。通り沿いのディオールやエルメスのファサード意匠も、銀座通りのブティックと同じく、それぞれの特徴が印象に残るが、建築上部にネオン広告が多いので、通りは広くとも自然と視点が上に行く。しかも広告は光の色が変化したり点滅したりと、単に輝いているわけではないので一際存在が目立つ。以前に照明探偵団ヘリコプターツアーで上空から銀座の街を眺めたときにも、ネオン広告が非常に輝き目立っていた。



みゆき通りの特徴や照度の記録

■並木通り

並木通りは、晴海通りを境に1町目~4丁目と5丁目~8丁目の二区間で、街路灯の意匠が異なる。共にメタルハライドランプ 250wで、白い光が続く。



白い光が通り沿いを飾る

■みゆき通り

みゆき通りは、もとは天皇が浜離宮などに赴かれる道筋で、御幸(天皇の外出・旅行の意味)、が名称の由来になっている。街路灯は他とは異なり、天辺に金の鳳凰の装飾が施してある。通りは狭いが、街路灯のデザインが特徴的だ。



一風変わったボール灯デザイン

■花椿通り

銀座通りとの交差点に建つ銀座資生堂ビルは、この通りの中で存在感がある。ファサードの色と磨きのかかった質が明るい銀座の街を映し出し、高級感が漂っている。

(窪田 照彦)



ファサードに夜景が映り込む銀座資生堂ビル

第28回 研究会サロン

街歩き、NYライトフェア 2005 報告、
100万人のキャンドルナイト 2005〔夏至〕
2005.07.28

■NYライトフェア 2005 の報告

4月にNYで開催されたライトフェアの報告が行われました。毎年アメリカで開催される展示会なのですが、欧米系の大手メーカーの中には出展を控えるメーカーがあるという一方で、アジア企業のブースが年々増えてきており、アワードを受賞した企業もあるとのこと。ブース以外にもその他、新製品を取り上げて発表するトレードショーや、会場外で行われたパーティについても報告されました。私もこのフェアを訪れた一人なのですが、これまでに何度もフェアを訪れている永田恵美子団員からの報告は、初めての私では気づかないことが盛りだくさんの大変興味深いものでした。永田団員の報告が前回の探偵団通信に掲載されていますので、見逃した方は是非ともご覧ください。



銀座の光について語る面出団長

■銀座街歩きの報告

銀座の光って何だろう。それを探るべく4つのグループにわかれての調査となった銀座街歩き。サロンでは各グループからの調査報告が行われました。

まずは晴海通りから。晴海通りは交通量の多い幹線道路のため、車道面の明るさを確保すべく、高さのあるポール灯から煌々と照らされていること。歩行者を意識した照明とは言えないようです。

次は中央通り。多くの店が立ち並び、ショッピングを楽しむ歩行者が多いこの通りには、ガス灯のなごりを残すクラシックなデザインのポール灯が立っているのですが、ランプが直接見えて眩しいとのこと。通りをまっすぐに見ると袖看板

や屋上の広告の多さが目に付いたことも報告されました。

そしてみゆき通りと花椿通り。みゆき通りは、天皇の往来があったことが名称の由来になっており、天辺に金の鳳凰が乗っている街路灯が大きな特徴となっているそうです。花椿通りではグレアカットの施されている街路灯により、他の通りよりもやや暗い印象を与える中で、資生堂ビルのファサードが存在感を持っているとのことでした。

最後に並木通り。この通りは4丁目を境にポール灯に新旧2つのデザインが見られたとのことですが、どちらのポール灯も拡散型で眩しいもののような感じでした。

各グループからの報告の後、面出団長からもひとこと。「銀座の光を代表するものはやはり袖看板や屋外広告塔だと言えるのではないかな。しかし、ここ最近ではファサード全体が光を放つような建築が増えてきている。もしかしたら、近い将来、銀座の光を語るキーワードが“ファサードの光”にかわるかもしれない。」みなさんはどう思われるでしょうか。

これまでとは少し異なった街歩きの報告で、サロンも今までとは一味違ったものになりました。それぞれが見てきたものを報告し、意見を交し合う貴重な時間になったのではないのでしょうか。



街歩きの調査風景も紹介されました



キャンドルナイトに参加した小学生たち

■キャンドルナイト 2005 夏至の報告

遠藤美希団員からキャンドルナイトの報告が行われました。今回は地元の小学生との交流もあり、そこに住まう人たちとも関わりあえる活動だったそうです。当日の様子を映した美しい映像から、満足感や充実感が伝わってきます。どんどんその輪が広がっているこのイベントなのですが、報告を聞いた団員の中からまた新たな参加者が生まれるかもしれませんね。

(奥中 顕子)

【照明探偵団の活動は以下の 21 社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
松下電工株式会社
株式会社ウシオスペック
ヤマギワ株式会社
山田照明株式会社
マックスレイ株式会社
ニッポ電機株式会社
株式会社エルコ・トートー
株式会社ウシオライティング
日本フィリップス株式会社
トキ・コーポレーション株式会社
東芝ライテック株式会社
大光電機株式会社
株式会社 MARUWA
小泉産業株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
湘南工作販売株式会社
小糸工業株式会社
株式会社遠藤照明

